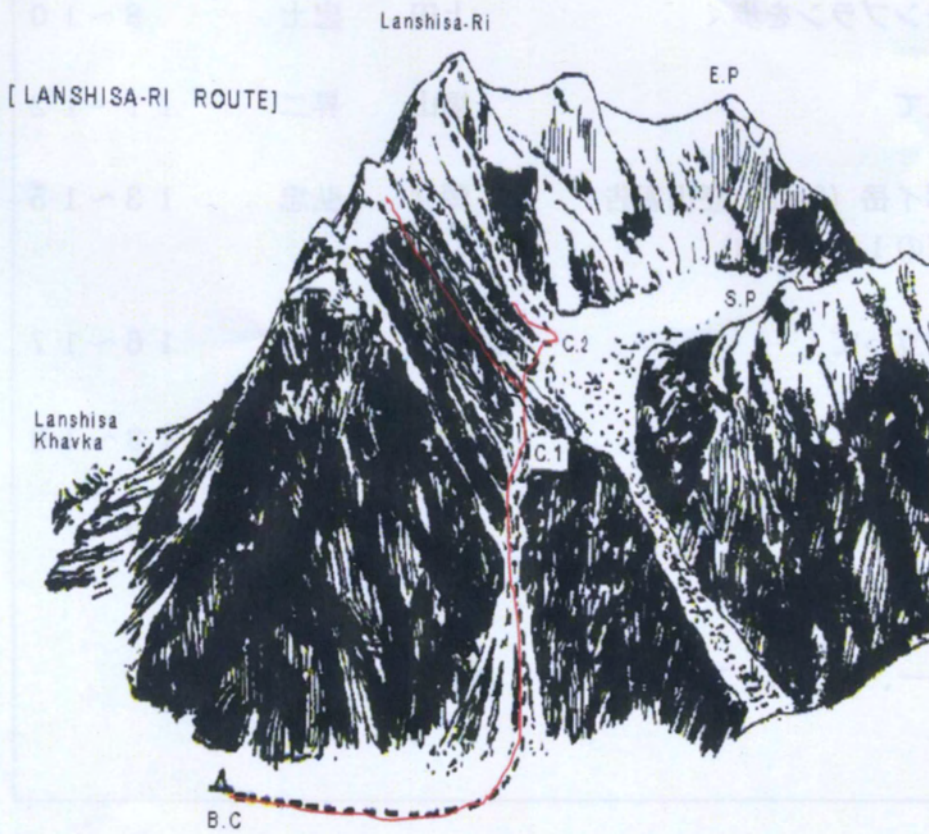


OCUAC

大阪市立大学山岳会会報 No. 51 2010.12.23

目次

		頁
表紙裏・写真&図 (ランシサ・リ西面および南面登攀ルート図)	武部 秀夫	
ランシサ・リ登山(速報)	武部 秀夫	1~2
ランタン・プロジェクトに就いて	兵頭 渉	3~5
トレッキング ネパール: マカルーBCより6200mコルを越えて	佐々木 惣四郎	6~7
ヨーロッパ: ツールドモンブランを歩く	上田 忠士	8~10
日本100名山を登り終えて	福山 昇二	11~12
ペテガリ岳(1736m)・アポイ岳(810m)登山報告 (日本200名山) (花の100名山)	澤井 弘忠	13~15
ラシュワ - 蔵尼国境に立って	山田 裕敏	16~17
古今回想	澤田 宗博	18~19
書籍の寄贈について	奥田 寛	20
裏表紙裏・写真 (マカルーBCからマカルー、ウエストコルの下り)	福山 昇二	



2010年秋のランタンヒマラヤ登山を終えて

武部 秀夫

(「岡山ランタンヒマラヤ登山隊2010」隊長)

10月3日から11月13日までの41日間、所属の岡山岳連登山隊はネパールのランタンヒマラヤ山群のナヤカンガ5844mとランシサ・リ6427mの2座登頂を目的に登山してまいりました。ナヤカンガは北東稜～北稜経由の雪壁、ナイフリッジのルートで10月17日11時25分に武部、シェルパ2名がナイフリッジの頂上に登頂しました。ランシサ・リは第2キャンプ(5750m)から上部の氷壁帯の状態が崩壊しており著しく悪いのでこの予定ルートを放棄し、新たに南西稜からルート工作13ピッチ(650m)するも主峰頂上まで遠すぎるため10月27日に南西稜上6000mにて断念いたしました。

登山隊は2名という隊構成の中、隊員1名が高所障害にて体調を崩し途中から帰国せざるを得ない状況で、残る武部とシェルパ2名で、昨今のヒマラヤメジャーピークで多く行われている「高所遠足」的な登山ではなくルートを自分で決めルート工作し頂をめざす「本来的登山」を素晴らしいクライミングパートナーシップにもとづいて実行できたことに喜びを感じました。

また地球温暖化の影響かと察せられますが、氷河後退が急速に進んでいることも予定ルートの崩壊という現実を目の当たりにして実感しました。峻峰ランシサ・リ主峰頂上への合理的なルートは第2キャンプ(5750m)から頂上西側の頂稜に突き上げる大氷壁帯を登攀するものですが、取付きより50m登ると目の前には4m幅のクレバスが横断しその上部からは城砦のようなセラックが今や倒れんばかりの状態でありました。7年前の2003年にこの氷壁帯を登攀した時とは比較にならない状況でした。もうこのルートはおそらく登れない状態が永遠に続くと思います。ルートを第2高峰(6145m)経由の南西稜に変更して登山を続けました。ここも取付きから2ピッチが斜度45度程度の岩壁から始まりボロボロのやばい岩稜(奥穂～西穂稜線をボロボロにしたような感じの稜)が続き、氷雪のナイフリッジ、ヒドンクレバス帯と気の抜けない13ピッチでした。このルートからランシサ・リ主峰へはもう一つテント(つまり第3キャンプ)が必要でしょう。クタクタになり上部からベースキャンプに戻り10月29日にベースキャンプを撤収しました。30日にキャンジンゴンパにて、トレッキング隊の方々と合流。この日久しぶりに(この日まで18日間日本語会話がなかった状態でした)日本人と会話。安堵感から心折れランタンリルン北面踏査を中止し帰路はゴザインクンド越えにて11月9日にカトマンズへ戻りました。

ナヤカンガベースキャンプ(4735m)付近でシシャパンマ(8027m)からランシサ・リまでの眺望を楽しみました。ランシサ・リは鋭く格好いい山でした。シシャパンマは登りたくなる大きい山でした。またネパールに赴く機会がありますのでカトマンズには共同装備と個人装備をデポしておきました。市大の方々も利用できるようにしておきます。

ランシサ・リ南西稜 クロニクル

予定していました主峰南壁氷壁直登ルートがルート崩壊のため、南西稜からのアタックに変更。

ピッチ	形状	支点	固定ロープm
1ピッチ	岩壁スラブ40度の傾斜	スノーバー 2本	50m8ミリ
2ピッチ	岩壁スラブ40度の傾斜	ハーケン 2枚	50m8ミリ
3ピッチ	ボロボロの岩稜	ハーケン 2枚	50m8ミリ
4ピッチ	ボロボロの岩稜	ハーケン 1枚 途中ギャップ あり	50m8ミリ
5ピッチ	ボロボロの岩稜	ハーケン 1枚	50m8ミリ
6ピッチ	ナイフリッジ(氷雪)	アイスク リュー 2本	50m8ミリ
7ピッチ	ナイフリッジ(氷雪)	アイスク リュー 2本	50m8ミリ
8ピッチ	ボロボロの岩稜	岩の突起	50m8ミリ
9ピッチ	ボロボロの岩稜	岩の突起	50m8ミリ
10ピッチ	ナイフリッジ(氷雪)	アイスク リュー 2本	50m8ミリ
11ピッチ	ナイフリッジ(氷雪)	アイスク リュー 2本	50m8ミリ
12ピッチ	ゆったり雪原	スノーバー 2本	50m8ミリ
13ピッチ	ゆったり雪原	スノーバー 2本	50m9ミリクライミングロープ

以降、ヒドンクレバスがあり、危険と判断し、ここで断念。

第2高峰まで目測10ピッチほどあるように見ました。その先は、ナイフリッジが続き、主峰の西の肩(直上ルートが頂稜に出る所)まで続いているように見えました。

2003年秋の時は、直上ルートでここまで登ることができました。

【参考】 行動日程表

月日	行程	宿泊高度	備考
10月10日	ランタン→キャンジンゴンパ(泊)	3800m	キャンジン・リ(4550m)順化トレ
10月11日	キャンジンゴンパ→途中キャンプ(泊)	4300m	
10月12日	途中キャンプ→ナヤカンガBC(泊)	4735m	
10月13日	ナヤカンガBC→キャンジンゴンパ(泊)	3800m	妹尾隊員肺水腫の疑い。キャンジンに下降(泊)
10月14日	キャンジンゴンパ→ナヤカンガBC(泊)	4735m	
10月15日	C1予定地&ガンジャラ往復(同上泊)	4735m	C1予定地からの帰途、ガンジャラに立ち寄る
10月16日	BC→C1(泊)	5050m	
10月17日	C1→ナヤカンガ頂上→BC(泊)	4735m	AM11:25武部、シェルパ2名 登頂
10月18日	BC→キャンジンゴンパ(泊)	3800m	
10月19日	キャンジンゴンパ(泊)	3800m	妹尾隊員下山(シャブルベンシへ)ニマノルブ同行
10月20日	ランタンリルンBC往復	3800m	
10月21日	キャンジン・リ往復	3800m	ニマノルブと再合流
10月22日	キャンジンゴンパ→ランシサカルカ(泊)	4300m	
10月23日	ランシサカルカ→ランシサ・リBC(泊)	4500m	
10月24日	C1予定地まで往復(同上泊)	4500m	
10月25日	BC→C1(泊)	5500m	
10月26日	C2と直上ルート偵察試登。(C2泊)	5750m	直上ルート、ルート崩壊のため断念
10月27日	C2撤去と南西稜ルート工作(C1泊)	5500m	
10月28日	C2→最高到達点→C1→BC(泊)	4500m	南西稜6000m地点で断念(13ピッチ固定ロープ)
10月29日	BC→ランシサカルカ→ヌマバタン(泊)	4200m	
10月30日	ヌマバタン→キャンジンゴンパ(泊)	3800m	トレッキング隊と合流

ランタン・プロジェクトに就いて

ランタン・プロジェクト事務局長 兵頭 渉

今年の5月、ランタン・リルン第一次遠征隊員3名の50年忌法要がベースキャンプ地とランタン村の追悼碑前で営まれ、その後に出かけた上部トレック期間の天幕内での何度かの論議にてランタン・プロジェクトが生まれました。会員の皆様にはメールにて本プロジェクトの概要を案内していますが、改めて本会報に集録します。広いヒマラヤ山域の中で「ランタン谷を集中的に」ということでして、一度ランタンに足を踏み入れられた方はその美しさに魅せられ、何故この「選択」と「集中」なのかをご理解いただけたと思います。

尚順不同ながら、プロジェクトの進展状況を先に記します。

- 8月 1日 キックオフ・ミーティング開催 最年長の宗實さん他約10名参加
- 9月11日 第二回ミーティング 岡山岳連創立60年記念遠征に参加する武部氏のランシサ・リ登山隊を本プロジェクトの一環とするとの了解を得る。
来春の計画としてシシャパンマ遠征が提起された。
- 12月4日 第三回ミーティング 武部隊（10月3日から約1ヶ月）の報告。次に来春のシシャパンマ計画を巡り、春か秋か、北からの一般ルートを迎える上での問題点と費用負担の大きさや準備期間、参加人員などに関し論議が重ねられ、結局本計画は見送られる事となった。
来春のプロジェクトは練り直しとなるが、List上の諸峰の中から選び秋の遠征をも視野に入れた目標を定め、年内にも素案が纏められる。出席者13名 宗實、近藤哲也、伴、佐々木、島川、山田、兵頭、福山、和田城志、武部大西保氏、梶山氏、橋尾女史

次回は2月5日（土）於市大交流センター内会議室 午前10時～12時半

ランタン・プロジェクト

背景

大阪市立大学山岳会にとってランタン・リルンとランタン谷周辺の山域は、3名の遭難死で終わった1961年の第一次遠征隊、1964年の二次隊（ウルキンマン、モリモト・ピークの初登頂）並びにランタン・リルン初登頂を成し遂げた1978年の第三次隊、そのための諸偵察行、加うるに数次にわたる現地での遭難追悼会等にて会員全員にとってなじみの深いものとなっています。今般第50回目の命日に因み現地にて法要を実施したところ30名に及ぶ会員が集い、亡くなった方々の冥福を祈念する事が出来ました。

その折改めてこのランタン谷を眺め、各人のこれからの山行に思いを巡らせたところ、『会員一人一人は微力だろうと同好の士が集まり時間をかければ、この世界一美しいと言われるランタン谷を取り巻く山々の頂上に我々の足跡を残すことが出来るのではないか』、との思いがトレック参加者多数の胸に共通して湧き出して参りました。この思いを実現させるための企画・実行計画を総称してランタン・プロジェクトと名付け、2011年の当会創立90周年記念事業として数年にわたり継続性のある山行をこの地で展開し、記録に残したいと考えています。

目 的

プロジェクトメンバーでランタン谷周辺の6,000m～7,000峰（リスト添付）の全山に登頂する。

付随して、ランタン谷周辺の地理及び峰々の登路などについての情報を体系的に整理し公開する。

登頂記録を大阪市立大学山岳会会報に掲載する。

登山計画

個別山行毎に参加者が隊を編成し、計画する。必要に応じプロジェクト事務局が調整する。

ただし、各隊には少なくとも1名の大阪市立大学山岳会関係者が参加する。

期 間

2010年～2015年の5年間とする。

プロジェクトメンバー

以下の方をメンバーの対象とします。

大阪市立大学山岳部部員、大阪市立大学山岳会会員・会友・賛助会員及び
関西・中国・四国・九州地域在（注1）の大学・一般の山岳会所属メンバーで
個別山行での登頂を目指す方。（大阪市立大学山岳部員、山岳会員の紹介が必要）
（注1：地域はこれを限定しない意見有、今後の検討課題）

費 用

参加費用は原則として個人負担とする。

同一地域での継続的なプロジェクトであり、一部装備、施設の保有・賃借に関するもの、及び登山料などについては、大阪市立大学山岳会の負担如何に関し今後の検討課題とする。

運 営

事務局を設置する。事務局メンバーは以下の通り。

- ・伴、佐々木、山田、福山、和田、兵頭（事務局長）
- ・本プロジェクトの趣旨に賛同し事務局入りを希望する者については、当会会員であれば制限を設けない。

プロジェクト連絡会をインターネットで随時開催する。

細則は後日プロジェクト連絡会にて決める。

以上

リスト

*：大阪市立大学山岳会 登頂済

- *. LANGTANG LIRNG 7246m (1978. 10. 24 大阪市立大学 初登)
- *. MORIMOTO PEAK 6150m (1964. 5. 8 大阪市立大学 初登)
(BHUNDANG・RI)
- *. URKINMANG 6151m (1964. 5. 5 大阪市立大学 初登)
- 1. SHISHA PANGMA 8027m
- 2. LANGTANG・RI 7205m
- 3. RISUM 7026m
- 4. GOLDUM 6620m
- 5. PEMTHANG・RI 6758m
- 6. PEMTHANG KARPO・RI 6865m
- 7. GURUKARPO・RI 6891m
- 8. DORJE LHAKPA 6966m
- 9. LANGSHISA・RI 6427m
- 10. GANCHEMPO 6387m
- 11. PONGGENDOPKU 5930m?
- 12. KYUNGKA・RI 6578m (OUT OF LIST?)
- 13. SHALBACHUM 6918m
- 14. YANSA TSENJI 6758m
- 15. KIMSHUN 6760m
- 16. KIMSHUN II m
- 17. GENGE・LIRU 6581m
- 18. NAYAKANGA 5846m (大阪市立大学 2010. 5. 7)

注) 以下の調査を踏まえ対象峰を選定する。

対象ピークにつき許可・不許可・不明、

許可峰の場合の登山隊隊員構成条件 (外国人のみで可、ネパール人
参加必須、ネパール人のみ可など)

ネパールトレック マカルーBCより6200mコルを越えて

佐々木 惣四郎

期間：9月30日～11月6日

参加者：佐々木惣四郎、福山昇二

<マカルーBCに向けて>

10月2日 佐々木、福山の2名にてカトマンズよりトレックを開始いたしました。とんでもないハプニングでスタートする事になりました。予定の飛行機がツムリントール飛行場の整備で閉鎖されていた為、バスでトレック出発地に向かったのですが、昼3時に一般バスでヒレまでゆき、ジープを2回乗り換え渡渉までして、結局24時間かけてトレック出発点に辿り着く事になりました。つまり、一般バスは、夜中中走ったのです。日本の深夜バスと同じですが、道が良くないので眠れません。

マカルーは、専任シェルパの生家があるところで、彼の家に寄って行く事になり、正式ルートより3-4日遅れて間道を辿り、マカルーBCにたどり着きました。パーティは、シェルパ2人、コック、キッチンボーイ、ポーター6人と総勢11人です。BCにつくまでの天気はモンスーンが明け切らず豪雨に2-3回襲われ、おまけにルートから外れた間道であるため、泥だらけ、ヒルだらけの道で、体に10匹ぐらいのヒルを1日半 体験させられました。ポーターは、足を血だらけにして歩いています。

ただビックリした事にポーターに18-22才の女性が4人おり、30KGの荷をかつぎ、しかも裸足で泥だらけの道をゆき、ヒルをものともしないのです。男性ポーターにも異色のエベレスト登頂者がいて、エベレスト登山の際、45KGの荷上げを1回にして\$90(1回15KGで\$30)を何回も稼ぐという戦車みたいな人物で圧倒されました。

今回も45KGぐらいの荷を背負ってのポーターで、限りない頼もしさを感じさせられました。

間道が正式ルートと合流した、Kauma Kharkaからは、さすがルートが整備され、楽チンの旅になりましたが、依然として天気が好くならず・・・

<マカルーBCよりシェルパニコルを超えて>

マカルーBCには10月15日到着したのですが、雪で何も見えず2日間沈殿して10月18日ぐらいより、モンスーンがようやく明け、18日 目の前にマカルーの大岩壁が姿を現しました。岩壁まで1Kmぐらいで、そこから8400mまで岩壁がせり上がっており、高度差3600mの威容を誇っています。

兎に角、見上げる首を後ろ一杯に倒さないと見えず、見るだけで疲れる状況！聞くとところによるとダウラギリBCでも同じ様な状況で、共に独立峰としての巨体を眺める事になります。何とでかいのかと感嘆の声すら出てきません。カンチェンジュンガも大きかったのですが、至近距離からの為、ひとまわり大きく見えました。

BCより6200mのシェルパニコルへの道は、岩石伝いに2日間 10時間の道のりでキャンプサイトだけ素晴らしい。コル超えは大変で、コルへの登り100mは、予想外のつらさでした。コルからの下りは大変で、高度差200mにザイルを張り、全貨物を下にロープで下ろすというもの。オーストリー隊の22名ポーターと、同一行動したのですが、一方人間は、フィックスロープを張りめぐらしたルートを空身でゆく事になります。荷を有しての下降は極めて難しい為です。

これを超えるとウエストコルに到達しますが、ここはバルンツエ峰7200mのキャンプ1で、ここからの下降は200mのアップザイレン（懸垂下降）する事になります。ただし、雪壁であるため荷はポーターがかついでフィックスに頼りながら下降する事になります。やがてバルンツエBC 5400mに至ります。このコルにテントを張って、小生にとっては初めての6000m以上での宿泊を経験。

このBCは、大盛況ぶりで10隊以上が設営していましたが、我々の到着時は、モンスーンが明けたところで1隊しか成功しておらず、多数が撤退していました。また、アタック中のシェルパがルート工作中、氷ブロックの直撃で死亡、確保者は親指の切断のアクシデントが23日発生しました。

このBCからアンブラッツ峠超えにてチュクンに行く予定でしたが、急遽メラ峠超えにてルクラにゆく事になりました。なかなかの長く素晴らしい道でしたが、ルクラにいたるまでの5日間は毎日7時間の歩きで、最終ルクラ手前では、4600mから2800mのルクラまで1800mの下降を強いられました。なおメラ・ラ（5400m）からカーレ・キャンプへ下山途中に大きな氷河が3年前にはあったのですが、氷河が大幅にとけ、ルートが極端に変わってしまっていました。氷河の退行は、どこでも激しく、この先どこまで進むのか気になって仕方ありません。

30日 カトマンズに無事帰りましたが、日本人パーティには1回も会わず外国人ばかりが目立つ旅でした。11月20日過ぎまで登山、トレックパーティが入る様です。8000m峰への登頂は、初期のモンスーン明け遅れにより、チョーオユー、シシャパンマ等々多くの隊が、上部で強風と積雪で撤退しています。

今回の旅は6000m以上での宿泊を経験する事、マカルーの雄姿に接する事でしたが、目的が果たせたと思っています。マカルーの大きさに刺激され、ダウラギリへも行きたくなりました。

ツールドモンブランを歩く

上田 忠士

4 年前に佐々木君とモンブランに登頂したが、その山容を違った角度から見たいと思い、家内と二人で一周コース「ツールドモンブラン」TMB を歩いた。この TMB はフランス、イタリア、スイス三カ国にまたがり、峠や谷を越えて歩く全長 166 km のトレールである。一部にバリエーションルートもあるが道は整備されており、一般的には 10 日間ぐらいで踏破できるようだ。景観は氷河の覆われた針峰群、大きく広い U 字谷と飽きることはない。私たちは一部バスを利用したが、130 km を踏破、獲得高度累計は 7600m、11 日間を要した。

1 日目： 晴れ

シャモニーからバスでレズーシュへ。ここでパンなどを買い、ロープウェイでベルヴューへ。ここからトレッキング開始。左手にモンブランへの登路、グーテ小屋への急峻な登りの岩稜がすばらしい。トリコ峠を越えて、氷河に覆われたミアーシ山を見ながら 600m 下ってさらに 200m 登って今夜の宿、トルック小屋に着いた。泊まり客は私たちとフランス人の 4 人のみ。

2 日目： 晴れ

パンとコーヒーだけの朝食をすませ 7:30 出発。コンタミンへ 600m 下り、モンジョ谷に沿った道を登る。幅は広く緩やかである。バルムの小屋でランチ。ここから本格的な登山道になる。ボンノム峠を越え、さらにクロウボンノム峠まで来ると、大きなボンノム小屋が眼下に見えた。小屋着 15:30。今日は 1200m の登り。小屋は 50~60 人で満員であった。

3 日目： 曇り、雨

あやしい空模様の中、雨具を着て出発。フル峠まで 1 時間弱の登り。私たち 2 人のみだ。この峠は 2665m TMB で最高地点。峠には雪があるがアイゼンを装着するほどのことはない。この峠越えはバリエーションルートになっているが、夏の終わりなら問題ない。かなりの雨の中をグラシエまで 900m 下る。この間 2、3 のパーティに会っただけ。モッテ小屋着 11:40。今日は短い行動計画を立てていて助かった。

4 日目： 曇り、ガス

夜中は強い雨と風であったが、雨の止むのを待って 8:40 出発。650m 登ってイタリアとの国境セイニョー峠 (2516m) に到着。峠はガスの中、視界がきかない。私たち二人のみである。5 分ぐらいいてイタリア側にベニーの谷を下った。途中からやや明るくなってエリザベッタ小屋に到着 12:00。今夜もワインを飲み夕食をとる。

5 日目： 晴れ

ベニーの谷を下り、コンバル湿原を約 1 時間歩く。ここから右手の尾根に取り付き、屹立したモンブラン南側を見ながらゆっくり歩く。天気もよく最高の景観である。途中モンブランを見ながらエリザベッタ小屋で作ってもらった弁当でランチ。シュクルーイ峠を経てクールマイヨールまで歩いて下り、ホテ

ル着 14:50。ここは個室。夕食は外で摂りシャワーを浴びてぐっすり眠る。

6日目： 晴れ

8:20 発のバスでフェレの谷のアルヌーヴァまで行きトレッキング開始。エレナ小屋まで登り1時間。ここから500m登ってフェレ峠(2537m)に到着。ここはイタリアとスイスの国境。天気はよくマッターホルン、モンテローザがよく見える。30分ぐらい景色を楽しみフェレの谷をスイス側に下る。草原の中でランチ。途中の休憩所でミルクを飲み、フーリまで下る。左手に三国境の白い岩峰モンドランが聳えている。フーリ到着 16:10。今日は750m登り、950mの下りであった。

7日目： 晴れ

今日は山岳コースでなく、フェレ谷に沿って山の中腹を歩くコースで15km。出発9:00。谷の左岸、右岸と森の中道を歩く。傾斜も緩く気持ちの良いウォーキングだ。途中イサット部落のレストランでランチ。ここから400m登って高原のシャンペ湖到着 15:40。湖畔の宿に落ち着く。今夜の泊まり客7人。ここはスイスフランの世界である。

8日目： 晴れ

シャンペダンバから森林の中の登りにかかる。小さな沢を4本越えると前が開け、ポビーヌである。マルテーニを見下ろす草原の中でランチ。いつもテルモスの湯でコーヒーを作る。ここから750m下ってフォルクラ峠経由トリアンに到着 16:00。夕食7:00。いつもながら就寝8:30。12人のドームトリルームに8人寝る。2食付57スイスフラン(約4800円)

9日目： 晴れ

出発8:20。ウルトラマラソンの標識に従ってバルムの峠方面の右側の山腹から尾根への道を取る。TMBの標識はなく、ここはTMBのバリエーションルートである。1000m登り11:40 バルムの峠の上方100mのコルに出る。モンブランの美しい姿が目飛び込んできた。ここはスイス、フランスの国境。しばらく景色を楽しみルツールまで800m下り、フランス山岳会の山荘に到着 15:30。

10日目： 晴れ

同宿したフランス人登山家は6時ごろ出かけた。私たちは6:30起床。出発8:30。モンロックよりTMBを登り始めた。急な梯子5~6箇所をすぎシェイズリーでランチ。家内が相当疲れてきたが、何とか目的のラックプランまで登った。14:00 到着。ここは池を隔ててモンブラン、ヴェルト針峰、グラランド・ジョラスなどの山容を望む最高の展望台だ。疲れがいっぺんに吹っ飛ぶ。1時間ぐらい休憩し、500m下って16:30 フレジュールへ着いた。今夜は10泊目、TMB最後の夜である。頭上に満点の星、眼下にシャモニーの明かりが見える。

11日目： 高曇り

今日はTMB最後の日。シャモニーに下る日である。出発は泊まり客で最も遅い8:30。天気はモンブラン上空にガスがかかっている程度で悪くない。多くのトレッカーはレズーシュまで歩きTMB完全踏破を目指す。私たちはシャモニー谷を隔てたモンブラン山塊を見ながら、アップ、ダウンを繰り返しプ

ランブラへ到着 10:50。しばらく景色を楽しみ最後の歩き、シャモニーまでの 1000m の下りにかかった。シャモニー到着 14:00。ボッソン氷河下のシャモニー YH 到着 15:00。10 泊 11 日のツールドモンブランが終わった。夜はワインで乾杯！

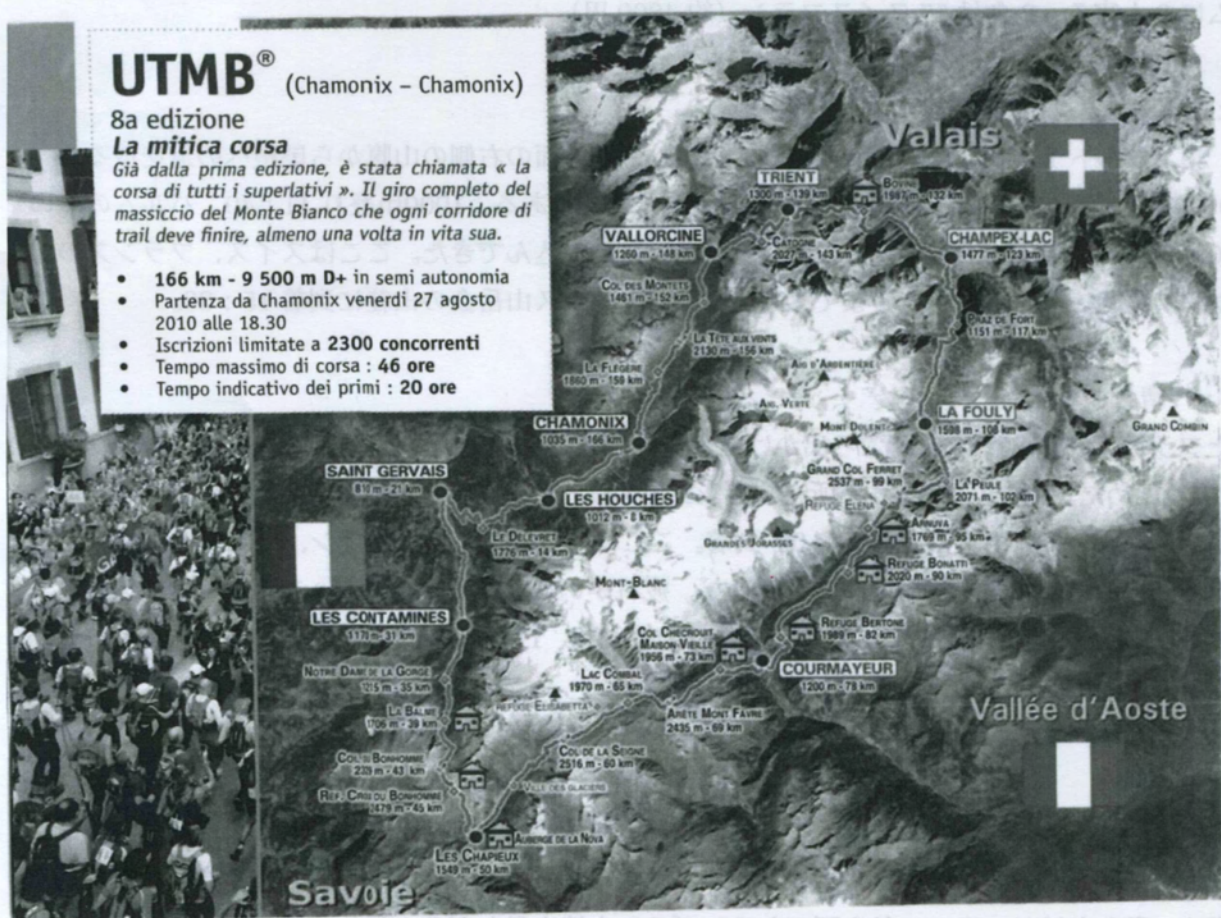
追記

- * 私たちは 8 月 25 日出発したが、やや遅いシーズン。天候は安定、トレッカーは少ないと聞いた。
- * 朝夕は肌寒いが日中は半ズボン、Tシャツの日もあった。ボンノムの小屋では私たちが泊まった翌日に降雪があったようだ。
- * 小屋は、さすがにヨーロッパ、ドミトリーが殆どであるが、ベッドか十分幅のある寝所が確保されている。二食付で 40 ユーロ前後である。
- * 小屋は立派な建物で大きく、収容人数も 40~60 人ぐらいだが、予約はした方がよさそう。満員で断られたトレッカーもいた。トイレは水洗、シャワー設備のある小屋が殆ど。
- * 私たちは 10 泊したが、この間、東洋人やイスラム系の姿は全く見なかった。
- * トレッカー、小屋の従業員の言葉はすべてフランス語のようで英語の通じない小屋もあった。

2010 年 9 月記

以上

<モンブラン周回概念図>



日本100名山を登り終えて

福山 昇二

深田久弥が選んだ日本100名山を意識して登りだしたのは4,5年前に買ったガイドブックがきっかけです。これまで日本アルプスはほぼ登っていましたが、それ以外の九州、上信越、関東、東北、北海道の山に順次、足を向けました。九州の山はフェリー、上信越・関東の山はマイカーにて登山口で仮眠をとり日帰り、東北・北海道は夏期休暇を利用して登りました。

登り始めて、100名山をめざす中高年登山者が多いことに改めて気付きました。ツアー参加者による行列登山、兎に角、出来るだけ楽なコースで登ればよいという登山のあり方に驚き、そのような登山をしている自分もこれでいいのかなという思いがありました。しかし、この中でなるほどこの山は名山に値するという体験もありました。

100名山の中で、とりわけ私の記憶に残る山を5つ選んで紹介します。

1 剣岳

昭和44年5月7日。山岳部新人合宿。長次郎谷より本峰。ちょっと部室を覗いたがために連れていかれた剣岳。日本にもこんな雪と岩の山があるのかという驚きと長次郎コルから頂上までの雪壁をトップで登るリーダー澤井さんのかっこよさに憧れ、山岳部生活が始まりました。

2 幌尻岳登山

昭和46年3月23日。山岳部春山合宿。16日間の日高山脈縦走登山。同行者は二上、和田、義本。七つ沼カールで沈殿後、夜明け前から出発し、頂上で見渡した雄大な北海道の山々は強く記憶に残っています。ちょっとした遠征気分でした。

3 黒部五郎岳

平成17年9月24日。新穂高温泉より往復(2泊3日)。同行者は職場のジョギングクラブ(ACC)の川端さん。紅葉しかけた黒部五郎岳の巨大なカール底を横断し、達した頂上から見た北アルプスの大展望はすばらしく神々の庭園という風格がありました。山スキーで行きたいと思っていた山です。

4 トムラウシ山

平成21年7月14日。トムラウシ温泉から頂上往復(日帰り)。同行者はACCの仲間。前トムを経るとトムラウシ公園という広々としたお花畑のある心が和む所がありました。その後、岩場を登り頂上に至る。大雪山脈の中で変化のある充実した登山でした。

5 飯豊山

平成 22 年 8 月 23 日。石転沢から大日岳アタック後、飯豊本山を経てダイクラ尾根下山(2 泊 3 日)。ACC 有志。100 名山最後の山はちょっと達成感のある登り方をしようと雪渓で有名な石転沢を登り、急で長大なダイクラ尾根を下りました。飯豊連山は山の深さ、険しさ、花や残雪の多さなどの点で東北随一の山塊であると感じました。

私の登山はどうもアルピニズム的ではなく、ワンダーリング的です。定年退職をして時間が自由にありまだ少し動ける間に、ヒマラヤを中心に海外の山のトレッキングを楽しみたいと考えています。



ペテガリ岳(1736m) ・ アポイ岳(810m) 登山報告

(日本200名山)

(花の100名山)

澤井 弘忠

6月の北海道は雪解けと夏が同居する生命の伊吹を感じる季節です。昨年もこの時期200名山稼ぎの暑寒別岳 芦別岳でしたが かなりの残雪でピッケルがほしい山行でした。今回は日高南部のペテガリ岳 カムイ岳(300名山)の計画で実動3日の計画でした。ところがこの時期のペテガリは藪山で長大な尾根を往復するだけの楽しさの少ない山であります。起点のペテガリ小屋までの林道が不通でカムイ小屋から尾根越えのアプローチです。途中花も少なく山ダニ多く内地の藪山となんら変わらなく、北海道の山では初めて快適さの少ない山でした。それ故カムイ岳から美しいアポイ岳へ急遽転進しました。

アポイ岳は日高山脈の最南端の山で太平洋から直接登る山です。起点のアポイ山荘は美しい快適な国民宿舎で回りは整備されたリゾートのような気持ちのいいエリアでした。天気もよく家族連れのハイカーがいっぱいの実質700m高度を登る楽しいハイキングでした。アヤメが最盛期で花の種類も多く眼下に太平洋を望む美しい山でありました。

メンバー：澤井弘忠(63) 山本政之(56 福岡大学OB 博多駅前山岳会)

6月23日(水) 曇りのち雨

新千歳空港 13:00⇒日高南部森林管理署 15:00⇒カムイ小屋 17:30

JAL便にて新千歳空港へ。山本は福岡から。今回熊予防に高価な熊除けスプレー(13000円 米国製)を持参。飛行機に乗せられないためオリックスレンタカーへガスボンベとスプレーを別送しておく。新ひだか町(旧静内町)の森林管理署へ事前にファックスにて申請していた元浦林道のゲートの鍵を借り受けに。元浦川沿いの道に行く。競馬馬の牧場ロードだ。ダービーを夢見る小さな牧場に親子馬が気持ちよさそうに戯れている。カムイ山荘まで直接車で行ける。途中エゾ鹿の群れに何度も遭遇。小屋は平屋建ての30帖くらいの板敷きで比較的新しい。われわれの独り占め。本来ペテガリ山荘までコイカクシュベチャリ林道で直接入れるのだが通行止めがここ何年か続いている為カムイ小屋からのアプローチになる。

6月24日(木) 曇りのち雨

カムイ山荘 4:30→10m滝 5:20→乗越し 6:20→ペッピリガイ沢林道 6:40→ペテガリ小屋 8:10~8:45→1000m ピーク 10:35→頂上直下コルT S 13:50

快適な小屋で19時から就寝。3時起床。小雨模様。パンとコーヒーの朝食。山本はパンアレルギーの為いつも前日から作っておいたアルファ米だ。沢登りスタイルで出発。林道を少し戻りシュオマナイ川(カムイ岳に突き上げている)を30mくらいの渡渉。680mピ

ークの西側のコルを目指し、沢をつめる。沢は小さく、藪ばかりだが赤旗に導かれる。ふみ跡もしっかりついている。まったく問題なし。コルから短い沢下り。ペッピリガイ川のエリアへ。フラットで広々とした気持ちのいいエリアだ。林道補修工事の小屋付近でいかにも惨めなキタキツネの子供がひもじそうに人間のおこぼれを待っている。ペテガリ小屋は立派で中2階もあり詰めれば30人くらい収容できそうだ。別荘の雰囲気だ。沢シューズセットをデポ。まったく人気がない。ここからペテガリ西尾根に入る。高度差1300mのブッシュの尾根だ。水3L/一人を追加して雨具を着用し上り始める。北海道の山の路はほとんどが尾根に忠実にたどっているような気がする。山人口が少ないせいだろう。花はほとんどない。アップダウンを繰り返しながら頂上直下のコルへ。藪の中だが雪が少し残っていた。予定通り。「さとうのごはん」とレトルト牛丼の粗末な夕食。山本も小生も酒を飲まないのですぐに終る。6時半就寝。

6月25日（金）快晴

T S 4:10→ペテガリ岳 5:30~6:00→TS 7:10~7:40→ペテガリ小屋 11:30~12:10→680m コル 14:40→カムイ小屋 16:25

熊笹の路を急登する。頂上直下まで樹林帯だ。ようやくの頂上。景色は360度素晴らしい景色だ。北には日高山脈の主だった山が連なっているが、ポロシリカムイエクウチカウシはどれかわからない。南は明日予定のピラミダルなカムイ岳 西は静内 東は十勝平野。これからは来た路をアップダウンを繰り返しながらひたすら歩かなくてはならない。力が出ない。この山に入って一人も出会わない。ペテガリ小屋からは林道だが工事業者の人たちに出会う。静内側から工事用車両のみ通行できるらしい。途中10分ほどトラックに便乗させてもらう。ありがたい。コル手前の沢身で初めて札幌からの単独登山者と出会う。彼はペテガリ小屋泊まりらしい。沢くだりの途中ズボンの折り返しを見るとびしっと山ダニが20匹くらい夜を待っていた。こんな沢山の山ダニとの出会いは初めてだ。どこから入ってきたのか、昨日から少しかゆいと思っていたが納得。丁寧に爪と爪でプチプチとつぶす。悔しい。

結構長いアルバイトであった。この山は内地の藪山と変わらず楽しい山行とはいいがたい。アプローチが大変だがやはり雪のシーズンの山だろう。それでも200名山だ。カムイ岳も同じような山であろう。急遽アポイ岳へ転進を決める。

6月26日（土）快晴

カムイ山荘 8:00⇒アポイ山荘 11:00⇒5合目 11:40⇒アポイ岳 12:35~13:00⇒アポイ山荘 14:15

森林管理署にキーを返還後国道336号線を引き返しアポイ山荘（国民宿舎）上の駐車場へ。とても綺麗に整備されている。日帰りハイキングの車が50台ほど止まっている。早速整備された路を行く。5合目までは樹林の中気持ちのいいウォーキングだ。上部はスカッと

太平洋を見ながらの尾根路。さすが「花の 100 名山」花を愛でながら一気に頂上へ。家族連れ、年配者夫婦が多く、このあたりのいいハイキングコースだ。

下山後、一路今夜の宿である沙流川温泉 ひだか荘へ。2 食付 7500 円。スキー場の公共の宿だ。計画終了後の温泉は又格別だ。来年は北海道最後の 200 名山夕張岳の予定。ちなみに現在 200 名山中 172 山まで。



ラシュワ ――蔵尼国境に立つて

山田 裕敏

今年の5月21日、ランタン谷での50年忌法要と上部トレックを終えてシャブルベンシに降り立った。今回はカトマンズからヘリを利用したので、往きにはここを通らなかったため、2年半ぶりに見るこの国境の町の変化がより印象的だった。中国政府による人・物・金の大量投入で国境点ラシュワまでの自動車道路建設工事は最盛期に差し掛かっており、定宿としているホテル前の道路を隔てた斜め向いの建物には中国の援助道路プロジェクト現地総括事務所が置かれていて、行きかうダンプや連絡用の四駆が此处で一旦駐停車してゆくし、夕刻にはボールに白飯を盛った立ち食い姿で街道の様子を眺める漢人達が嫌でも目に付く状況にあった。

何しろ此处はチベットに源流を持つトリスリ川沿いの村で、国境は約13km北に迫り、カトマンズへの最短路にあるので、ラサから西へ南へと伸びてきている中国圏の拡大を諸に受ける位置にあり、今日の開発は当然の成り行きなのだが、やはりこの辺りはランタン谷の入口の寒村で留まっていた欲しかったとの思いも残る。

翌日からはカトマンズへ下るトラック本隊と分かれて更に北を目指し、「ランタン・リルンを西北から眺める」、と言うのが今回の私の残されたネパールでの日程であるが、その記述は後回しにして、少しネパールとチベットの国境を巡る人々の行き来を振り返ってみたい。

険峻なヒマラヤ山脈を横断し、太古の昔から人はその生存と物質的豊かさを求めてこの両地域を往来してきた。それを仏教の面で見ればインドとネパールの国境で生れた釈迦による教えがチベットに入りラマ教として特化され、それが今度はネパールに布教され今日見られるように山岳地域に多様なラマ教文化圏が展開されてきた。このような寒冷・貧困の支配する山岳地帯にも人々は果敢にその営みを続け独自の文化を生み育ててきた事実には多大の敬意を払いたい。これまでこの地域に関する書籍についての私の好みは登山や紀行のものに限っていたし、2006年に出版された薬師義美さんの「大ヒマラヤ探検史」も積読状態で放置していたが、今回ラシュワ国境で「Nepal/Tibet Ancient Trade Route」と刻まれた石碑をみてにわかに歴史に興味を覚え、帰国後その大著を精読した。つまり従来は薬師さんの本を読みトレックに出かけたのだが、今度はトレックに出かけて彼の本の素晴らしさを認識した次第である。

この本はその副題にあるとおり、地図の空白部を埋めるために働いた英人とその指揮下のインド人パンディットたちの活躍に大部分が割かれているが、17世紀から20世紀に掛けてのヒマラヤの南からのカソリック宣教師団や英国に代表される西洋勢力と北にあるチベットの確かな存在とそれを支え且つ宗主しようとする清国＝東洋勢力とのやり取りが面白い。真ん中にあるネパールも大したもの、歴史の流れに大きな影響を与えている。

1769年にカトマンズにゴルカ王朝が成立し今日のネパールの版図を治めるが、それに留

まずチベットのキーロン（ラシュワの北約 70km）やニヤラム（コダリから北 25km）に勢力を伸ばし、更にシガールからシガツエとチベット東部に接近する。1750 年来チベットは清朝の宗主権下にあったため乾隆帝は援軍を差し向ける。6 千人の清蔵連合軍はキーロンからラシュワを経てトリスリ川を南下し、ドウンチェからベトラワチに至った。ここでゴルカ軍に遭遇し清蔵軍は大敗し講和となる。1792 年の出来事だが、この後チベットは鎖国する。

ゴルカ王朝の膨張は、東部ではシッキム、西部はガルワル併合を生み、南部では英領インドの一部を占領し、これにより 1814 年イギリス＝ネパール戦争が勃発する。ネパールはこの時の敗戦後鎖国する。この二国の鎖国により一帯は静穏化するが、地理上の究明は鎖国で排除された西洋人の下請けとしてインド人密偵たちに委ねられる事となった。

さて、今回のトレックはシェルパ 1 名とポーター 2 名を帯同したもので、シャブルベンシを 5 月 22 日に出発し北へ向った。初日は目的地をタトパニ（温泉）に定めた為に現地人に遥か北西の高地にある別の温泉に導かれたため一日を失った。翌 23 日は工事中のトラック道を辿りティムレで道中唯一と見られるバツティに泊まる。24 日、バツティから 1 時間歩きガテコーラの出合いの古い村落に着き、ここからガテコーラを遡上すること 1 時間半の地点で幕営。25 日は雨天沈殿。26 日、曇り、森林帯の中道を更に登り、コンクリートの小橋を渡りカルカを過ぎると道は澤を離れ左側の急傾斜に向う。西から北への転進だ。急坂を約 3 時間登り峠に着く。高度 3,400m。ここから道は等高線沿いとなる。ヤクの通るしっかりした道だ。峠から奥への道筋は植生が変わりモミの大木が現れ見通しは利かなくなる。大峰の奥駆け道のような感じで道幅はランタン村へのそれと似たようなもの。1 時間ほど歩き右から流れ落ちる沢に出合い幕営した。27 日は最終日なので空身で 3 時間進み引き返した。到達地点は奥国の 5 万分の 1 地形図ランタン・ウエスト上の x3661 尾根名 Maduwa と記されている部分の 3,250m 位の地点。此处から先は大木は少なく見通しは悪くない。前方遠くに 2 箇所ほど牧草地とカルカが見える。当日は残念ながら雨雲が迫り上部は見えない。対岸のチベット域は南面に当たり牧草地が広く展開されており自動車道もくっきりと刻まれている。未開発のネパール側とは好対照だ。この日時間さえあれば Ghyalana コーラを越え次の Nyubsasyu コーラの 2,600m 地点までテントを伸ばす事が出来ただろう。人工物が見えるので少なくともそこまでは道はあるはず。地図で見る限りこの二つの谷の間の尾根を上部に向えば 6,400m の主稜線に至りそこから 1 km 西にランタンⅡ、東に 5km で Mera 峰を経由してリルン主峰に到達できる。いつの日かその 6,400m に達し両峰を見上げると共に、ランタン谷を見下ろしてみたいものである。

帰路にガテコーラ村から 30 分北のラシュワ国境点を訪れた。150m 位の長さの銃眼付きの要塞遺構があって往時を偲ぶ事が出来る。東北より流れ来て尼/蔵国境を隔する Lande Khola はここでトリスリ川と合流する。目下はこの川の架橋工事中である。次の旅はランタン北面でエネルギーを使った後、ここラシュワからチベットに入りキーロンを経てカイラスまでと心に決めて国境を離れた。

古今回想

澤田 宗博

今回のネパール行きは、1969年（岩友会）、1970年（カンジロバ）以来3回目となる。当時は、あらゆる面において情報も少なく「未知への不安・興味」があった。今のカトマンズはどうなっているんだろうと、往時を思い出しながらこの墓参の旅を楽しみに参加した。

●カトマンズは人ごみと騒音

関西空港を後にしてトリブヴァン空港へ。シェルパのテンバラに出迎えを受け市内に向う。人や車がメチャクチャに多くしかも埃っぽい。思わずタオルを口に当てる。車といえば、往時は日本製中古車（トヨタ）でタイガー（虎）のマークのあるタクシーがあったぐらい。市内へ入ると人、人、騒音と埃で驚きの連続。サイクリング気分で観光ができると思っていたのに・・・自転車はほとんど見当たらない。ホテル「ゲスト・ハウス」に着き、ホッとする。カンジロバの時に宿泊したホテル「ラリ・グラス」はまだあるのかな？と思い、ホテル関係者やアニータさん（上田先輩の友人）に尋ねたが、知らないと言う。多分廃業したのだろう。（原稿を書きながらガイドブックで調べてみると、当時「ラリ・グラス」は中心部を少し外れた Dillibazar にあったので気がつかなかったかも？）

街は昔の古い建物はほとんどなく、道路沿いに仏具工芸品・みやげ物屋・スポーツ店・両替屋・食堂等が処狭しと並んでいた。会計担当者として暗い雑貨店でレート以上に両替したことを思い出しながら、バザールの人ごみを歩く。インターネットやスーパーマーケットの店があるのには驚いた。郊外へ向うとオートバイクに乗った若者たちであふれている。カトマンズに大きな企業があるわけでもなし通勤中とは考えられない。一体彼らは何のために、どこに行くんだろう？また、ペットボトルやビニール等のゴミが散乱している。どこで、どのように処理しているのだろうか？40年前は、牛がのんびりと道路の真中を歩き、ハエがたかる豚の頭がそのまま売られ、ヒッピー族がたむろしていたのに・・・と隔世の感を覚える。

●大規模化したトリブヴァン大学

墓参を終えて、再びカトマンズへ。常慶さんから、「できれば現在音信不通の Dr.アマチャ、Dr.シャルマを尋ねて欲しい」とのメッセージが後便であり、とりあえず情報を得るためにひとりで大学を尋ねることにした。タクシードライバーと料金交渉をし、普段着で郊外のキルティプールへ。大学に到着するが、野原にぽつんとあった大学（1959年創設）は、住宅や大学の建物で環境が一変していて当時の面影がない。どこで記念撮影を撮ったのかなと思いながら、ドライバーに案内してもらいながら事務所へ。10時にならないと事務員が出勤しないと言うので時間待ち。ようやく担当者と思われ

る男性が現れ、カンジロバ遠征隊のことを話したら「あなたが探しているアマチャ氏は、今は大学副学長となっており間もなくやって来る」とのこと。住所だけでもわかればと思っていたのに、40年ぶりに再会できるなんて……。彼は74才となり、鼻髭は白くなっているが元気ですぐわかった。握手して部屋で30分ほど会話をし、写真を撮って別れる。

アマチャ氏から Dr.シャルマのアドレスを聞いたが時間がなくて会うことができなかった。(アマチャ氏によると退職し元気であるとのこと) また、2009年の資料によれば 9学部あり、Students Enrollment ; a total of 172,375 student population within its constituent campuses throughout the country.

Levelwise Distribution ; Certificate 48,393 Graduate 89,531 Postgraduate 29,146 M.Phil 284 Doctorate 205 others 4,816 Total 172,375 とある。

●後退しているリルン氷河

リルン氷河を初めて見た。今年は雪が少なかったのか凄みは感じなかった。墓参の時、間近に氷河の見える処に行ったら、和田君が「1978年の初登頂の時に比べたら氷河が随分後退している」と、言う。下部は岩盤が大きく露出し、滝となり水が流れていた。アメリカ元副大統領のゴア氏著作「不都合な真実」で南極・北極・アルプス等が温暖化のため氷河が多く失われている写真を掲載しているが、正に実感した次第。30~50年後にはほとんどの氷河がなくなるのではないかと、改めて思わざるをえない。

●トレッキング 東・西の違い

ランタン谷の旅は初めてで、シャブルベンシ (1,460m) までは途中工事をしているものの車で行けるようになった。そこから3日でキャンジン・ゴンパ (3,800m) 着。それもバッティ (山小屋) に泊まりそこで食事ができるなんて、出発前に佐々木さんに聞くまで知らなかった。人や物の交易がある中部・東部地区はすごいと思った。何しろ40年ぶりの山旅だが、随分恵まれたトレッキングと感じた。西ネパールは、すべてテント自炊生活、食糧も持参物以外は現地調達で、なかなか手に入らないことがあり (今は違うのかな?)、特に1969年の時は水道もなく水汲みに苦労した記憶がある。フォクサンド湖リンモ村から30日をかけてタンセン村までの旅は惨めで、水がなく、道路にたまった雨水で米を炊き、泥で赤くなったご飯を食べたり、鶏や卵が手に入らなくて昼飯抜きやチャパティ一枚だけの旅をしたことを、この原稿を書きながら懐かしく回想しています。

書籍の寄贈について

奥田 寛

<注>

- (1) 内藤 毅氏(昭和28年卒)より、下記書面(日付:2010年7月6日)とともに同封の「平和の礎～海外引揚者が語り継ぐ労苦 18～」(独立行政法人 平和祈念事業 特別基金。平成20年7月30日発行)を寄贈される旨のご案内がありました。同書288頁～308頁には、内藤氏の「北朝鮮脱出記」が掲載されています。

<注>

「暑中お見舞申上げます

会報50号頂きました ランタンリルン追悼のレポート拝読 池永先輩始め28名の方々の雄拳 心から讃えたいと存じます 実は 森本大先輩はソ連シベリヤから帰国されてすぐ 私共商大山岳部戦後スタートのトレーニングにご参加頂きご指導賜りました 実は小生も 同封冊子の通り 北鮮でソ連陸軍の病院で零下三十度の下で働いたこともあり 二人でロシア語で話したこともあり 忘れることの出来ない先輩です ご子息も参加されたのですね

また池田正男先輩の追悼のメッセージもございましたが 小生商大予科3年終了後 旧制商大入学の1950年から数年間 同氏の北畠のご邸宅に食事、室付で住わせて頂きました上に 池永さんの辞にあります上田安子様にはフランス語の家庭教師としてそれなりの報酬を頂きました(商大予科で専攻外国語はフランス語でした)(フランス語の教員免許状は今ももっています)

(以下 後略)

*** ご寄贈頂いた書籍は、来春には、「ヒュッテ雪線」の1階書棚(上から三段目の棚)に蔵置予定です。**

- (2) 澤井 弘忠氏(昭和46年卒)より、「ヒマラヤへの道～京都大学学士山岳会の五十年～」(今西錦司 編。中央公論社。1988年5月発行)の寄贈を受けました。

*** ご寄贈頂いた書籍は、来春には、「ヒュッテ雪線」の2階奥の書棚に蔵置予定です。**





<編集後記>

- ・ 今秋、ワークスタイル研究所の堂馬氏（静岡大山岳会）から、「西ネパールの未踏峰」登山を考えている女性に情報提供をしてあげて欲しい、と声がかかりました。なぜ「西ネパール」の、更に「未踏峰」なのか、と思いつつ面談しました。適当な資料等を交え説明して別れたのですが、後日、カンジロバヒマールより西北にある6300m前後の未踏峰に決めたことを知りました。さて、この計画が実現した暁には、「古今回想」（澤田氏）の登山版はどんな内容になるものか、と楽しみにしているところです。
- ・ ところで上記の堂馬氏には、会報47号（2008年12月発行）より「印刷工房」として印刷・製本面で大変お世話になってきましたが、本号をもって終了の運びとなりました。この間の多大なご協力に対しまして厚く御礼申し上げる次第です。（奥田 記）